『西南アジア研究』No. 33, 1990

Svapnavāsavadatta のプロット分析

増 田 良 介

はじめに

ここで扱う戯曲 Svapnavāsavadatta(『夢に見られたヴァーサヴァダッターについての戯曲』)[1] はサンスクリットで書かれた全6幕の劇で,今世紀初頭に発見されて以来インド演劇史上の名作の一つとされ,諸国語に翻訳されている。作者は普通,バーサ(2-3世紀?)とされているが,作者についても年代についても実はほとんど確実な手掛かりはない。そのため,戦前を中心に激しい議論が展開され,年代だけをとっても紀元前6世紀から11世紀まで,実に前後17世紀にわたる様々な説が出たが,いまなお確定していない[2]。しかし,バーサについて我々はそれほど伝記的情報を与えられているわけでもなく,広大なインドを舞台にした文学の歴史について堅固な座標軸を得ているわけでもない現状では,作者の同定や年代の決定について乏しい材料から議論することはそれ自体あまり有意義なこととは言えない。そこで本論ではこれまでほとんどなされていなかったこの劇のプロットそのものの分析[3] を通じて作品成立の事情や作者の意図を探ることを試みた。その結果本戯曲の随所に見られる不審な点を,作者の制作意図という視点からかなりの整合性をもって説明することができた。その結果とそこから推測されるこの劇の成立事情を併せて報告する。

I

この劇は,散逸した説話集『大物語』(Bṛhatkathā)[4] に題材を採っているといわれる。インドの説話集は一つの大きな枠物語のなかに多くの挿話が挿入される形をしばしば採るが,ウダヤナとヴァーサヴァダッターの恋愛の物語は,この『大物語』の枠物語であったことが推定されている。この話は古くからかなり有名で,これを元にして多くの戯曲や小説が書かれた。次に掲げるのはこの劇の梗概であるが,本論文の趣旨から言うと,戯曲

テキスト自体から梗概を作ること自体不可能とも言える。しかしこれからの論議を理解して頂くためには不可欠なものであるので,広く普及している文学史書やこの戯曲の刊本の解題などから,一般的に考えられているこの戯曲の梗概をまとめておく[5]。

劇が始まるまでの設定：小国ヴァッツァの王ウダヤナは,政略のために大国マガダの王女パドマーヴァティーと結婚することが必要だが,王妃ヴァーサヴァダッターを心から愛しているので,第二の夫人をめとることなど考えもしない。そこで大臣のヤウガンダラーヤナは屋敷に火を放ち,王妃ヴァーサヴァダッターと共に,救おうとした自分も焼け死んだように見せかけた。そしてヴァーサヴァダッターを妹アーヴァンティカーということにして,身分を隠して行者の姿でマガダ国の方に旅した。

第1幕：アーシュラマ(苦行者の集合住居)にやって来た二人は,ちょうどマガダ王女パドマーヴァティーがやって来ていることを知る。パドマーヴァティーは苦行者に何か布施を行うことを考え,だれか望みのある苦行者はないかと問う。ヤウガンダラーヤナは,自分の妹(実はヴァーサヴァダッター)をその保護のもとに残し,やがてウダヤナの妃となるであろうパドマーヴァティーをヴァーサヴァダッターの貞操の証人にすることを思い付く。そう申し出たヤウガンダラーヤナの望みをパドマーヴァティーは承諾する。そこへ一人の学生が休息を求めて苦行林にやって来る。彼はラーヴァーナカの村で学習していた学生である。彼は,かの地で大火事があり,王妃ヴァーサヴァダッターと大臣ヤウガンダラーヤナが焼け死んだ,そして王は気も触れるほど悲しんだが,大臣ルマンヴァットの献身でかろうじて持ちこたえている,と語る。ヴァーサヴァダッターは王の悲しみを聞いて涙を流し,ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットの献身を聞いて安心し,パドマーヴァティーはウダヤナの様子を聞いて恋心を生じる。

第2幕：ヴァーサヴァダッターはパドマーヴァティーと懇意になり,彼女の遊び相手となる。二人がまり遊びをしていると,パドマーヴァティーがウダヤナと結婚することになったことが乳母によって知らされる。ヴァーサヴァダッターは動揺するが,王が愛情からではなく義務感から結婚しようとしているのだと乳母から知ってひとまず気が落ちつく。

第3幕：結婚式の喧噪を逃れて庭に出て来たヴァーサヴァダッターが,夫が他の人のものになる不幸を嘆いている。そこへ一人の侍女がマガダ王妃の命で,アーヴァンティカー(実はヴァーサヴァダッター)に結婚式の花輪を編むことを頼みに来る。ヴァーサヴァダッターは,愛する夫の結婚式のために自ら花輪を編まねばならぬ運命を嘆きながらもしかたなく引き受ける。

第4幕：花を摘むためにヴァーサヴァダッター，パドマーヴァティー，侍女が庭に出て来る。三人が話していると向こうから王とヴァサンタカ(道化)がやって来る。ヴァーサヴァダッターは男性に見られることを避けるので，三人は茂みに隠れる。そして彼女らははからずも王と道化の会話を盗み聞きすることになる。やがて道化が王に「パドマーヴァティーとヴァーサヴァダッターのうち，どちらがかわいいですか」と尋ねる。王は迷った末，「私はパドマーヴァティーを愛している。しかし，私の心は今なお死んだヴァーサヴァダッターから離れない」と答える。そして道化と話しているうちの王の悲しみは新たによみがえり，ついに涙を流す。道化は王が目を洗うための水を取りに行く。二人の夫人はそれぞれに心を動かされる。ヴァーサヴァダッターは立ち去り，パドマーヴァティーは王に近付く。道化が水をもって来る。王はパドマーヴァティーには花粉が目に入ったのだという。

第5幕：侍女たちが，「パドマーヴァティーは頭痛を病み，浴室の休息用ベッドに横になっている」と告げる。王と道化は浴室に駆けつける。ところが，そこにはパドマーヴァティーがいなかったので，王はベッドに横になって待つことにする。彼は眠気を払うため道化に話をさせるが結局眠ってしまい，道化は出て行く。しばらくすると，頭痛のパドマーヴァティーを見舞いにヴァーサヴァダッターが浴室へやって来て，パドマーヴァティーが寝ていると思ってそのベッドに座る。そのとき王が夢の中で，「ヴァーサヴァダッター」と叫んだので，そこにいるのが王であることに気付く。王は夢の中でヴァーサヴァダッターと話をしていたのである。ほんの少しの間，ヴァーサヴァダッターは王に返事をしているが，王が目を覚ます前に急いで引き下がった。ヴァーサヴァダッターが出て行くや否や王は飛び上がって叫んだ。「ヴァーサヴァダッターよ，待て。ああ，なんと急いで私は出て行こうとしたのか。そのとき私は激しく扉につき当たった。それからは何も分からない。それは真実であろうか，それともただ私の願いであろうか。」

突然王のところにマガダ王の侍従が入って来る。彼は，敵アールニ軍は分割され，ルマンヴァット率いるヴァッツァ軍もマガダ軍とともに出撃するため到着したことを告げる。王はいざ出撃せんといって出て行く。

第6幕：戦は勝利に終わった。ある日，王が宮廷でヴァーサヴァダッターの追憶に耽っていると，ヴァーサヴァダッターの父マハーセーナの使いが到着して，王とヴァーサヴァダッターの婚礼の絵を思い出の品として届けて来る。パドマーヴァティーはこの絵を見て，初めてかの侍女が実はヴァーサヴァダッターであったことに気付く。大臣ヤウガンダラーヤナがその場に現れる。彼は王妃を連れ去ったことを詫びるが，王はそれが

国益のためであったことを知って感謝し,大団円となる。

II

筆者はかって別の論文で,この劇の解釈においてこれまで看過されて来た一点を示した[6]。その要旨をここに掲げて今回の論議の出発点とする。

この劇の開始時点でヴァーサヴァダッターは夫と離れて,変装して国外に身を隠しているわけだが,それは大臣ヤウガンダラーヤナの考えた政略結婚をうまく進めるための策略のひとつである[7]。さてここでヴァーサヴァダッターは愛する夫を騙して別れて国外で暮らすというつらい境遇を耐えねばならないのであるから,発案者であるヤウガンダラーヤナは事情をすべて話したうえで彼女を説得した,と考えるのが当然であろう。ところが本文をよく読むと,第2幕で乳母から聞かされるまで,つまり第1幕全部と第2幕の途中まで,彼女は夫の新しい結婚の話も,自分の逃亡生活がその結婚を円滑に進めるためであることも全く知らないことが判明する。それは第2幕の前半では気楽に冗談などを言っていた彼女が,結婚のことを聞いてしまった後半では一転して沈みこみ,それが第3幕まで続いていることなどでわかる。この設定は,ヴァーサヴァダッターが結婚の話を知らされ悲しむという過程の心理を描くことがこの劇の第1～3幕の目的であり,そのために必要であったのだと思われる。しかしそうすると,なぜヤウガンダラーヤナはヴァーサヴァダッターに黙っていたのか,またウダヤナ王にヴァーサヴァダッターが死んだと思わせるということを,それが何のためであるかを言わずにどうやって説得できたのか,というように,劇のプロットの上で疑問が生じて来る。

今回の論議はここから始める。まずヤウガンダラーヤナがヴァッツァ国再興のためウダヤナ王をパドマーヴァティーと結婚させようと努力している,ということはこれまで自明とされてきた[8]。しかしこのことが本当に自明かどうかは大いに問題がある。この戯曲の元になった話をほぼ保存していると見られる話が説話集 Kathāsaritsāgara(『物語の河川が流れている海』以下 KSS と略)にあるが,その話では確かにそうである[9]。KSS のヤウガンダラーヤナは非常に強い意志で政略結婚を推進する。計画を立てると将軍ルマンヴァットやヴァーサヴァダッターを説得し,自ら老婆羅門に化けてマガダの都まで彼女を連れて行ってパドマーヴァティーに預け,その足で王の元に戻り,結婚の一切を取り仕切っている。彼が何を目的としてどう行動したかは非常に明快に語られている。ここではウダヤナとヴァーサヴァダッターの夫婦愛は単なる小道具で,ヤウガンダラーヤナの名策士ぶりにより重点が置かれ,鮮やかに描かれている。政治的説話として統一が

とれ,よくできた話である。

さて,戯曲の方ではヤウガンダラーヤナはわきへ押しやられ,二人の愛情による心理の動きが全面に出て来る。ただ,各幕はむしろ独立したスケッチとしての性格が強く,心理的なできごとの連なり自体にストーリーを展開していく力はない。この6つの幕を統一された一つの劇として見るためには,秘密の政策の実行とそれによるヒロインの一時的な不幸,そして政策の成功による幸福の回復という外郭があったほうがずっと都合がよい。恋愛劇であるにもかかわらずこの劇のあらすじを述べるとなるとどうしても政治のことが中心になってしまうのはそのためである。

しかし,ヤウガンダラーヤナが強力な政策として王の結婚を進めていること,その相手がパドマーヴァティーであること,そのために彼は擬装火災を起こしたこと,そして彼は結婚促進のためにその他の努力をしていることなど,政治的な面でのあらすじを示す諸要素は劇本文の中に全く書かれていない。もし予備知識なしに戯曲の本文だけを読むならば,ヤウガンダラーヤナが結婚のために努力したという筋を考えつくことはできないのである。

Ⅲ

これから,ヤウガンダラーヤナのセリフの中で,(1)彼の持っている計画について,また(2)ウダヤナ王とパドマーヴァティーの結婚について,言及されている箇所を全て取り出してみる。劇の登場人物の中でヤウガンダラーヤナの計画がどんなことなのかを知っている人物はただ一人,彼自身のみである[10]。従って彼の口から計画の内容が語られなければ,劇には彼の計画について何も書かれていないと言える。さて,KSSでは主役格のヤウガンダラーヤナだが,戯曲では第1幕と第6幕にしか登場しない。最初に,彼がウダヤナの結婚に言及している場面をすべて抜き出してみる。

まず第1幕,この苦行林にパドマーヴァティーがやって来ることを侍従から聞いたとき,ヤウガンダラーヤナはこういう。

Yau.：(svagatam)evam/eṣā sā magadharājaputrī padmāvatī nāma, yā puṣpakabhadrādibhir ādeśikair ādiṣṭā svāmino devī bhaviṣyati/tataḥ,

pradveṣo bahumāno vā saṁkalpād upajāyate/

bhartṛdārābhilāṣitvād asyāṁ me mahatī svatā

(独白)そうか。マガダのパドマーヴァティー王女か。プシュパカバドラなどの予言者たちによって陛下の王妃になると予言されていた。ならば,

憎しみや尊敬は思惑から生ずるものだ。王の妻となることを望んでいたので,私は彼女に非常な親近感を覚える。(Act I, 7)[11]

次はヴァーサヴァダッターをパドマーヴァティーに預けたあとのセリフである。

Yau.：(ātmagatam) hanta bhoḥ ! ardham avasitaṁ bhārasya/Yathā mantribhiḥ saha samarthitaṁ tathā pariṇamati/tataḥ pratiṣṭhite svāmini tatrabhavatīm upanayato me ihā = trabhavatī magadharājaputrī viśvāsasthānaṁ bhaviṣyati/kutaḥ,

padmāvatī narapater mahiṣī bhavitrī
dṛṣṭā vipattir atha yaiḥ prathamaṁ pradiṣṭā/
tatpratyayāt kṛtam idaṁ na hi siddhavākyāny
utkramya gacchati vidhiḥ suparīkṣitāni//

(独白)ああ,義務の半分を果たした。大臣と考えたとおりに事態は進展している。そして,主君が復位して,王妃をお連れしたとき,このマガダ王女殿下が[貞節の]証人となってくださることだろう。なぜならば,

パドマーヴァティーはきっと王の妃となられる方と,かつてこの災を告げたものたちが予言した。彼らを信頼してこうしたのだ。なぜならば聖人のよく試練に耐えた言葉を運命は越えて行かぬゆえ。(Act I, 11)

また,終幕で再登場したヤウガンダラーヤナと王はこのようなやりとりをする。

Rājā：vayasya yaugandharāyaṇa ! devyapanaye kā kṛtā te buddhiḥ/

Yau.：kauśambīmātraṁ paripālayāmīti/

Rājā：atha padmāvatyā haste kiṁ nyāsakāraṇam/

Yau.：puṣpakabhadrādibhir ādeśikair ādiṣṭā svāmino devī bhaviṣyatīti/

王：友ヤウガンダラーヤナよ,王妃を連れ出したのは何のためだったのだ。

ヤウガンダラーヤナ：ただカーウシャンビー(ヴァッツァの都)を守らんがため。

王：ではなぜパドマーヴァティーに預けたのだ。

ヤウガンダラーヤナ：プシュパカバドラなどの予言者たちが,陛下の王妃になると予言しましたから。(Act VI, 18[10-14])

上の三例すべてで,結婚が予言された,ということが,ヴァーサヴァダッターをパドマーヴァティーに預けたことの理由として言われているのが注目される。つまり彼は,パドマーヴァティーがウダヤナ王の妃となるという確信の根拠は予言者[12]による予言であった,と三度にわたって言っているのに,結婚は自分が計画した政策であるとか,ウダヤナを結婚させるためにヴァーサヴァダッターが夫と離れている,ということを全く

言っていないのである[13)]。

Ⅳ

次に逆の方向から見る。つまり彼が自分の任務に言及している箇所のすべてを,第1幕と第6幕(彼はこの2幕のみに登場する)から抜き出してみる。

(独白)……大臣たちと考えた通りに事態は進展している。……

(前出, Act I, 10[22])

……saviśramo hy ayaṃ *bhāraḥ*……

(独白)こっちの任務は息つくこともあるが……(Act I, 15)

pracchādya rājamahiṣīṁ nṛpater hitārthaṁ

kāmaṃ mayā *kṛtam idaṁ* hitam ity avekṣya/

siddhe 'pi nāma mama *karmaṇi*……

(独白)……王のために王妃を隠して,私のしたことは確かに王のためになったと思うし,私の行なったことは大成功だったが,……(Act VI, 15)

王:友ヤウガンダラーヤナよ,王妃を連れ出したのは何のためだったのだ。

ヤウガンダラーヤナ:ただカーウシャンビー(ヴァッツァの都)を守るため。

(前出, Act VI[10-11])

ヤウガンダラーヤナは計画の内容を一度も具体的に語らず,非常に曖昧な言い方をしている。会話ならともかく,少なくとも独白でまでこのように曖昧な言い方をする必要はあるのだろうか。とくに第6幕の王との対話では,もっとはっきりした答えがあってしかるべきであるし,このように抽象的な答えに王が納得してしまうのも不自然である。彼の目的がウダヤナの結婚であるという伝統的な設定を作者が確固として採用していたなら,ここまで隠す必要はない。ともかく結婚の一件がヴァッツァ再興のための唯一の政策であり,したがって自分の努力対象であるという一般的認識は,劇本文には根拠を見いだせないと言える。物語のレヴェルで強いて修正するなら例えばこうなる。まず,ヤウガンダラーヤナはウダヤナとパドマーヴァティーの結婚を願っていたが,この結婚を自分の努力対象とは考えず,何かの予言によって実現が疑いないできごとと考えていた。また,彼はなんらかの政治的な秘密計画をもち,そのために王をさえだまして姿を消し,またヴァーサヴァダッターをも説得して焼け死んだことにさせたが,それはウダヤナの結婚とは別のことである,と。そうすると作者は,われわれの知っているこの劇の筋と相当違ったものを考えていたことになるのだろうか。

V

しかし,この話の筋を観客がよく知っていたとしたらどうか。ヤウガンダラーヤナの計画は誰もが知っているのだから説明は不要であるし,結婚のことについて彼が何度も「予言されたことだ」と言っていることも,予言者によって予言されてはいるが自分も努力している,と解釈すればいい,という考え方である。この立場をとれば伝統的な見方を変えなくてすむように思える。そして実際,観客が大体の筋をあらかじめ知っており,作者もそれを前提としていたことは間違いない。例えば第5幕にはウダヤナとヴァーサヴァダッターの会話にヴィラチカー Viracikā という名前が出てくる。これはウダヤナの妻のひとり(KSS には登場する)であるが,この劇中ではこの箇所でしか言及されない。またウダヤナとヴァーサヴァダッターを結び付けるきっかけとなったヴィーナー(一種のリュート)について,第4幕で言及があり,第6幕では実物が出てくる。このように,劇の外部の事柄が劇中に説明なしに出てくるということは,観客がこの劇の題材について,かなり詳しく,それもこの劇に扱われた挿話を含む物語の全体を知っていたと考えて間違いはないであろう。従って,作者がこれまでの解釈と全く別の設定(前章の最後に書いたような)を意図していたとは考えにくい。

とはいえ,ヤウガンダラーヤナが,彼の政策がウダヤナのパドマーヴァティーとの結婚であることを全く言っていないという事実は偶然では片付けられない。観客がよく知っていれば詳しい説明が不要になるのは真実としても,ここまで言及を避ける必要はないからである。ヤウガンダラーヤナの発言のうちの該当箇所を上のようにならべてみると,やはりいかにも奇妙である。ウダヤナの結婚について,彼がその中心的な推進者のはずなのに,それがほのめかしすらされていない。彼の秘密計画についての発言の方はもっと不可解だ。政略結婚が彼の計画であるなら,なぜ idam「それ」だの karman「行い」だのと曖昧にしておく必要があるのだろうか。それも独白なのにである。

これらの材料からは作者の一つの制作姿勢を読み取るべきであろう。ウダヤナの結婚やヤウガンダラーヤナの計画についての言及を故意に避けている姿勢である。ヤウガンダラーヤナがウダヤナの再婚を政治的な意図で計画し,そのためにヴァーサヴァダッターを擬装焼死させた,という筋だてが,作者には何らかの理由で都合が悪かった。それで,本当ははっきり別の筋にしたかったのだが,観客は誰も筋を知っているし,うまくつじつまを合わせることもできなかったので,それは断念せざるを得なかった。結局作者は意識的にか無意識的にか,いささか不徹底な手を使ってこのジレンマを解決した。な

るべくそのあたりに触れず,やむを得ない場合でもidamなどとぼかしておく。そうすると筋をよく知っている観客は自分の知っている話に勝手にあてはめて解釈してくれるし,作者にとっては都合のわるいストーリーを避けられる。つまりAをBに変えるのではなくゼロにしてしまったのである。

ではなぜ都合が悪いのであろうか。ここで前の論文の結果とつながってくる。ヴァーサヴァダッターは夫が再婚すること,その相手がパドマーヴァティーであることを全く知らない。このことと,ヤウガンダラーヤナはヴァッツァ国再興のためにはウダヤナ王とパドマーヴァティーの結婚が必要であると考えて,その邪魔になるヴァーサヴァダッターを火事で死んだことにした,という設定を両立させるのは困難である。たくさんの疑問が出る。なぜヤウガンダラーヤナがヴァーサヴァダッターに結婚のことを隠したのか。第2,3幕でのあれほどの悲しみかたから考えると非常に残酷なことだ。それに理由を打ち明けずにどうしてこんなことを納得させられたのか。ヴァーサヴァダッターはウダヤナを非常に深く愛しているのだから,夫をだまして死んだと思わせるなどという思い切った計略はただでさえ説得するのが難しいはずなのにである。

ストーリーの細部だけを都合よく変更して調整することも不可能である。結婚の方は予言のせいにしてしまうこともできるが,ヤウガンダラーヤナの計画の方は変えようがない。劇作上の要請から,ヴァーサヴァダッターが夫としばらく離れること,夫の新しい結婚を目撃しなければならないこと,そしてその苦難が国の運命のためであることの三点は絶対に変更できない。ところが,ヤウガンダラーヤナの政策の内容が政略結婚ではいけないとすると,この三条件を満たす政策を別に考え出さねばならない。これはどうしても無理である。

作者はヴァーサヴァダッターの無知という設定を保持するためにヤウガンダラーヤナの計画の方を犠牲にしたのである。この劇の第1～3幕は,ヴァーサヴァダッターが夫の結婚のことを知った驚きと悲しみの心理描写を柱に成立しているのだから,彼女の結婚についての無知という設定は譲れない。ヤウガンダラーヤナの計画の方の設定は有名であるがこの劇のテーマとはあまり関係ない,そこでこちらを観客の関心の届かないところに置いてしまえば何とかこの矛盾をのりきれるのではないか,と作者は考えた。この説明がもっとも整合性があるように思われる。

VI

そこで,政略や結婚に触れざるを得ない場面を減らすことがまず必要である。劇全体

を見渡すと,そのために選択されたとみられるストーリーの設定がかなり多く見られる。まずヤウガンダラーヤナの出番の異常な少なさである。ヤウガンダラーヤナはヴァーサヴァダッターを助けようとして死んだことになって王のもとから姿を消す。さらに第1幕でヴァーサヴァダッターをパドマーヴァティーに預けたあと彼女の前からも姿を消す。そして潜伏して何かしていたらしいのだが,再び姿を現すのは終幕の第6幕である。KSSでは最も重要な人物である彼が,このように劇では非常に出番が少ない。

ストーリー展開の上で,ヴァーサヴァダッターだけではなくヤウガンダラーヤナまで死んだことにする必然性は何もない[14]。そもそも彼はヴァッツァ国の事実上の政治執行者なのである。しかも王もだまさないといけない理由がまたわからない。そして潜伏中の彼の行動の目的や様子について劇中で何も語られておらず,消息すらわからないというのも異常である。敵国に死んだと思わせておいた方がいいような種類の政治工作は確かにありうるが,その内容が観客に知らされないというのはなぜなのか。

KSSではこの間彼は王のもとに戻って,マガダ王の結婚申し込みに対してすかさず承諾の返事を送るなどいろいろ活躍している。(KSSではヴァーサヴァダッターとともに死んだことになるのはヤウガンダラーヤナではなくてヴァサンタカで,彼は王妃のそばで励ましたり楽しませたりしている。)ところが劇では,ウダヤナだけでなくパドマーヴァティーの前からも姿を消してしまうのである。彼がウダヤナの結婚を自分の政策と考えているならば,KSSのように王のもとに戻っていろいろ取り仕切ったり,王を説得したりするほうがずっと有効なはずである。第2～5幕で潜伏している間の彼の行動が,結婚促進のための工作であるということももちろん言われていない。この可能性は次に掲げるパドマーヴァティーの乳母のセリフ(第2幕)からも否定される。なおこのセリフは結婚の成立に関する唯一の証言である。

「他の用でこの地に来られたウダヤナ王の生まれのよさ,知恵,若さ,美しさをご覧になった大王さま自ら姫君をお与えになった」

つまり結婚は,ウダヤナ自身の美徳と,彼がマガダにやってきた偶然(何の用でやって来たのかはまたもや不明)によって決まったのである。ここにヤウガンダラーヤナが黒子として関与している可能性も考えにくい。彼の関与を観客に知らせようと思えば,たとえば謎の苦行者があらわれてどうかしたとかいうことを乳母の口から語らせることもできよう。にもかかわらず何の言及もないということは,作者は結婚の成立にヤウガンダラーヤナの関与を認めなかったということである。結婚はヤウガンダラーヤナの計略の結果ではなく偶然によって成就した。いわば予言の実現にすぎないということになる。

これらは全て,ヤウガンダラーヤナを観客の前から遠ざけておくことが作者が望んだためであると考えるのが最も納得できる。ヤウガンダラーヤナが舞台に多く出て来ることは作者にとって都合が悪かった。彼がいると,彼の計画のことやウダヤナの結婚のことに触れざるを得ない。少しの回数なら前述のように曖昧にしておくこともできようが,あまり多くなると計画の具体的内容に触れないわけにいかなくなる。そこで少々無理が出てもヤウガンダラーヤナの出番が少なくなるような設定を行ったのである。

次に登場人物の選択である。ここにもヤウガンダラーヤナの計画を観客の目に触れさせまいとする意志が働いていると思われる。KSSでは将軍のルマンヴァット(劇にも名前だけは出る)やヴァーサヴァダッターの兄ゴーパーラカという人物が出て来るが,劇には登場しない[15]。説話を劇にするときに登場人物を削ることはしばしばあるし,普通理由付けもいらない。しかしここでは特別な意味が認められる。KSSでヤウガンダラーヤナがこのルマンヴァットとゴーパーラカには自分の計画(政略結婚のこと)を知らせており,この二人もヴァーサヴァダッターの説得などに活躍する。一方劇のほうではこの二人が削られることによってヤウガンダラーヤナの計画を知る人物は本人ただ一人になっている。ヤウガンダラーヤナ一人なら彼の独白の部分のみで処理すればいいが,計画を知る他の人物が登場して会話の場面があると,計画のことを観客に対して曖昧にしておくことは飛躍的にむずかしくなる。ということは登場人物の選択もやはり,ヤウガンダラーヤナの計画を曖昧にするという目的に奉仕しているのである。

もう一つ,第1幕の構成そのものもヤウガンダラーヤナの計画を曖昧にする,という目的に意図的に合致させられたと思われる。この劇の第1幕は計画立案から周囲の人々の説得,そして放火までの過程(KSSではもちろん明確に語られている。)が終わったところから始まる。KSSの読者にはヤウガンダラーヤナが何を考えて行動しているか非常によくわかる。ヤウガンダラーヤナはヴァッツァ国再興のためにはウダヤナとマガダ王女パドマーヴァティーの政略結婚が一番よい政策であると考える。しかしウダヤナは王妃ヴァーサヴァダッターを愛しているのでマガダ王が承知しない。そこで屋敷に放火してヴァーサヴァダッターを死んだと見せ掛けることにする。しかし戯曲のほうはそれが終わったところから始まっている。そのかわり,王妃と大臣の死の一部始終は第1幕後半で登場する学生によって語られる。このように手の込んだ構成を採用したのもヤウガンダラーヤナの計画の内容に言及することを避けるためと考えれば納得出来る。この学生は世間の代表であるから,彼が語るのは世の人の目に映った一部始終である。ヴァーサヴァダッターとヤウガンダラーヤナが火事で死んだのでウダヤナ王はひどく悲しんで

いる,と彼は語る。彼は計略の内容をまったく知らないから当然それには全く言及しない。つまり計画の立案と放火が終わったところから戯曲を始めること,そして火事で王妃と大臣を失って王が悲しんでいることを学生という外部の傍観者によって語らせることによって,作者はヤウガンダラーヤナの計画の目的が何であるかを言わずに劇の大体の設定を語ることに成功している。

これらの設定によって,劇中で「本当ならヤウガンダラーヤナの計画がウダヤナの結婚であることに言及されて当然の箇所」は先にあげたように,わずか10カ所ほどになった。ここまで減らせばヤウガンダラーヤナの計画の内容を観客の関心からそらしておけるし,その10カ所もこの数なら曖昧にはぐらかしておくことが可能になる。

Ⅶ

最後に今回の考察の結果を要約しておく。ヴァーサヴァダッターが結婚のことを知らないという設定はこの劇の第1～3幕を成立させるために絶対必要な要素であった。ところがこの設定はヤウガンダラーヤナの計画は政略結婚であるということと衝突する。なぜヤウガンダラーヤナはヴァーサヴァダッターに計画を話さなかったのか,計画を知らせずにヴァーサヴァダッターを説得できたのはなぜか,ということである。第一の状況設定は変えられないから,第二の状況設定を何とかしなければならない。しかしヴァーサヴァダッターが二つの不幸(夫との別離と夫の結婚を目の前で見なければならないこと)に,国の運命のために耐えぬくという点は保存せねばならなかったから,少しぐらいの修正で切り抜けることは不可能である。

ところがウダヤナとヴァーサヴァダッターの愛とそれをめぐる心理の動きがこの劇の中心に据えられたことで,政治的要素は重要でなくなっている。それを利用して作者は可能な限りヤウガンダラーヤナの計画について触れないという方法で,観客の注意をそらすことを考えた。具体的には以下のようなことである。

1) ヤウガンダラーヤナがヴァーサヴァダッターとともに死んだふりをする。

2) ヤウガンダラーヤナが第2～5幕で舞台から姿を消す。

3) ルマンヴァット,ゴーパーラカが登場しない。

4) 第1幕はヤウガンダラーヤナの計画立案と実行の場面が終わったあとで始まる。

5) 劇以前のストーリーは第1幕後半,学生という一般人の目を通して語られる。

1～3によって劇中から政策を知っている人間を追い出し,計画について触れる機会を少なくする。4,5によって,計画の意図だけをあいまいにしたまま状況設定を観客に

知らせられる。さて,それでもヤウガンダラーヤナが自分の計画または結婚の話に触れざるをえないところでは次のようにした。

6) ヤウガンダラーヤナの計画は曖昧にして語らない。

7) ウダヤナとパドマーヴァティーの結婚の成立はヤウガンダラーヤナの政策ではない。運命による予言成就である。

ではヤウガンダラーヤナの計画は何なのか,ということになるが,観客はみな伝統的な話の筋を知っている。素直な観客なら都合よく解釈して見逃してくれそうだ,と作者は考えた。これが以上の考察から推定されるこの劇の成立の一面である。

結語

一つのサンスクリットの文学作品が,どのような意図のもと,どのような方法で制作されたかということについて,我々は全く情報を持っていないに等しい。従って今回,いくぶん特殊な事例であるかもしれないにせよ,一つの作品のかなりの部分について,その要素が選択された理由と成立過程における各部相互の関係を本文自体から推定することができたことは,より正確な理解のために意味のあることと言えよう。しかしその結果を上のように作品成立の一面という形で整理し記述するのが果たして最良の方法であるかは自信がない。さらに考えるべき点であろう。

また,本来政治的説話であったものを,このように複雑な方法で恋愛心理劇に変更したことそれ自体にどのような意図があったのかは新たな疑問である。KSS から判断すると,『ブリハットカター』にはヴァーサヴァダッターの心理などほとんど描かれていたとは思えない。(もし描かれていたなら劇の作者と同じジレンマが生じたであろう。)すると戯曲中の心理描写はすべて劇作者の手になるものである。これだけのものを書くにはかなりしっかりした表現意図があったはずである。恋愛劇全盛の風潮があって作者がそれに従ったのか,それとも既存の物語を新しい視点から見ることに価値を見いだす風潮があったのか,あるいは作者がそういう思想をもっていたのか。もちろんすぐに結論のでることではないが常に意識しておくべき問題点である。幸い本戯曲と同一の環境で制作されたと見られる戯曲が他に12編存在しているので,それらの分析によって当時の文学環境について明らかになる点もあろう。

さて,本論文の分析結果は他の形でも利用することが可能である。例えば,上の1)〜7)はこの劇独自の設定のもとにはじめて必要となる設定である。とするとこれらはこの劇の作者が導入した設定であって,先行の話型から伝承されたものでない可能性が強

い。とくにその設定が不自然なものである場合,その可能性はより強いと言える。副次的なことだが,同類の説話や戯曲などの伝承関係の研究に役立つであろう。また,バーサに帰せられる全部で13編の戯曲は,作者が同一であるかどうかも正確には分かっていないのが現状である。今回の結果は語彙や形式に関することと違って表面だけ模倣するということはできないし,その必要もないので,より信頼性の高い比較研究に貢献しうるであろう。

---

1) バーサ及び本戯曲については多くの論文がある。ビブリオグラフィは以下を参照。A.D. Pusalker, *Bhāsa—A Study,* Delhi, 1968(2nd revised ed.), pp. 530-549 ; N. P. Unni, *New Problems in Bhāsa Plays,* Trivandrum, 1978, pp. 323-328 ; V. Venkatachalam, *Bhāsa,* Delhi, 1986, pp. 156-167 ; 辻直四郎,『サンスクリット文学史』,東京,1973, pp. 206-208.

2) U. Venkatakrishna Rao (Bhāsa, *IHQ,* XXXIV, pp. 96-113)のリストによる。彼によると最も古い紀元前6世紀を主張するのは Bhide, Dikshitar, Haraprasad Sastri, 最も新しい11世紀は Ramavatara Sarma Pandeya, Rangacharya Reddi である。

3) これまでに存在する研究のうちでプロットそのものの分析を扱ったものはないわけではない。最も有名なものに F. Lacóte, La source de la Vāsavadatta, *JA,* 1919. pp. 493-525がある。彼はやはりこの戯曲を KSS などと比較している。しかし彼は,劇作者があいまいにした部分が多いことを,単に観客によく知られていて説明する必要がなかったためであるとし,第1幕での学生の報告,ヤウガンダラーヤナが最初と最後にしか登場しないことなどを,「この細部が信憑性と出来事の論理性に合致し,カシミール版が純粋でないのに対し,バーサがオリジナルを知っていたということが分からない人がいようか。」と言っているように,彼は KSS などの話型よりも劇の話型のほうが古い形を残していると考えている。しかしこの意見には賛成できない。かなり長いこの論文には他にも根拠のない推断が多く,ヴァッツァ国の戦争についての考察など興味深い意見が含まれているにもかかわらず,全面的には承服しがたい。それは彼がこの物語を歴史的事実のごとく扱って,劇に書かれていない要素を,単に物語のレベルで,他の説話集から補って説明しようとしたことに主に起因している。

本戯曲のプロット分析を扱った研究としては,もうひとつ G. K. Bhat, Svapnavāsavadatta : A Critical Study of the Plot-Construction, *Journal of the University of Bombay,* Sept. 1946, pp. 58-80という論文があるが,入手できなかった。しかし Pusalker, Op. cit., p. 498によって概要を知ることができる。それによると Bhat の発見したところでは,物語の完全に人間的な側面を選択して,バーサは「彼の関心を登場人物の心理の動きと反応に集中している。」彼は「劇的興味に満ちた状況」を創造し,それらを自然かつ巧妙に扱っている。「バーサは劇的緊張を創造し維持する力を明白に持って」いて,「ほかの多くのサンスクリット劇作家よりもすぐれた劇作法を確かに示

している。」と，作品の礼讃に終始している。

しかし，Lacóteも，そしてPusalkerの紹介から判断するとBhatも，ヴァーサヴァダッターが第2幕の途中まで夫の結婚の話を知らないことに全く気付いていない。これは他のあらゆる研究に関していえることで，これまで知る限り，この事実を記しているのはSaradranjan Roy(& Kumudranjan Roy)の校注本のみである。彼らは，*Bhāsa's Swapnavasavadattam*, Calcutta, 1936, Introd. p. xxxxi (梗概の部分)で次のように記している。

"In his perplexity Yaugandharayana approached the queen and relying on her good sense represented to her that for state purpose her temporary disappearance was necessary and would lead to the future greatness of her husband. *The plan of marriage (of Udayana and Padmavati) however, was not divulged.*"

しかし残念なことに彼はこのことをさほど重要視せず，それ以上の考察はしていない。またRoyの指摘に気付いて引用している研究者もない。

4) Bṛhatkathā(6世紀以前，Guṇāḍhya作と言われる)はPaiśācī『蛮語』なる言語で書かれていたという大規模な説話集である。Bṛhatkathāそのものは現存せず，ネパールのBṛhatkathāślokasaṁgraha(『Bṛhatkathāの韻文による要約』，8-9世紀？Budhasvāmin作)，カシミールのBṛhatkathāmañjarī(『Bṛhatkathāの花束』，1037年頃，Kṣemendra作)及びKathāsaritsāgara(1063-1081頃，Somadeva作)という改編本が残されている。なお本論文ではKSSをしばしば比較対象にするが，KSSの成立が戯曲の成立より前である可能性は非常に少なく，まして互いに伝承関係があることは考えにくい。従ってよく知られたこの物語の標準的な例として参照したに過ぎない。しかし，Bṛhatkathāは挿話が増補されていくにつれ，枠物語の方は次第に顧みられることが少なくなったので，本戯曲の出典となった物語はあまり大きな改編は受けず伝わっていると考えられることも事実である。なお，Bṛhatkathāślokasaṁgrahaには，この劇に相当する挿話はない。

5) S. Konow, *Das Indische Drama*, pp. 54f.；辻直四郎，上掲書 p. 27f.；ヴィンテルニッツ，『インドの純文学』(中野義照訳) pp. 189-193；A. K. Warder, *Indian Kāvya Literature*, vol. 2, pp. 279-286などの文学史およびM. R. Kale(Bonbay 1929, 7 th ed. 1969), C. R. Devadhar(Poona 1962)などの校注本。

6) 増田良介「Svapnavāsavadattaの解釈」，『東海仏教』，第三十五輯 pp. 75-86.

7) このことは当戯曲を扱ったあらゆる書物に書かれている。Kale, ibid. p. 31；Devadhar, ibid. intro. p.xviii；ヴィンテルニッツ，上掲書，p. 189；A. C. Woolner & Lakshman Sarup, *Thirteen Trivandrum plays attributed to Bhāsa*, London, 1930-31(Rptd. 1985, Delhi) p. 37；etc. しかし本文中に述べたようにこのことは劇本文には全く書かれていないので，上記の研究者たちはKSSなどによって補ったものと思われる。

8）注7参照。

9）Kathāsaritsāgara, III. 15-16；岩本裕訳,『カターサリットサーガラ(一)』(岩波文庫)pp. 95-140.

10）実はこの,計画の内容を知っているのが彼一人であるという事実にも作者の意志が働いていると思われる。これについては後述する。

11）テキストはDevadharのもの(*Plays ascribed to Bhāsa*, Poona 1962)を使用した。なおAct. I. 1[3]は第1幕第1詩節のあと3行目を示す。第2，3幕は詩節がないので数字がそのまま行数を示す。

12）KSSで「予言者」にあたるものを探すと,ナーラダという聖仙の登場がある。王の一行がラーヴァーナカ村(ここで火事を起こす手筈になっていた)に出発しようとすると,この聖仙が突然訪ねてきていろいろ予言や忠告をする。しかしそれは,パドマーヴァティーが王の妻となるであろう,という内容ではない。

13）第2番目にあげた例に「大臣たちと考えた通り」という言葉がある。これがウダヤナの新しい結婚を示すのではないか,と思われるかもしれないが,これはありえない。この言葉はヴァーサヴァダッターをパドマーヴァティーに預けるという行為が完了した直後に発せられる。しかし,「ヴァーサヴァダッターをパドマーヴァティーに預けること」を「大臣たちと考えていた」可能性はない。なぜなら劇中でヤウガンダラーヤナは,パドマーヴァティーが苦行林に来ていることを知ってかなりの時間がたってからヴァーサヴァダッターを預けることを思い付いている。したがってこの委託行為は計画的なことではなくその場の思い付きである。(「ヴァーサヴァダッターを誰か信頼できる人に預ける」ことを指すとでも考えるならまだ理解出来る。彼らはそのために苦行林にやって来たということもありうる。)この「考えたこと」はまた,「ウダヤナがパドマーヴァティーと結婚しやすくすること」でもありえない。なぜなら,ヴァーサヴァダッターを預けても結婚推進には何の役にもたたない。この行為によって生じる利益は,ヴァーサヴァダッターの安全が保証されたままヤウガンダラーヤナがより行動しやすい身軽な状態になること,である。もし「パドマーヴァティーに預けること」を指しているとすれば彼の計画が結婚のことである可能性もあるだろうが,前述のようにこの可能性は否定されるので,「考えたとおり」が「パドマーヴァティーに預けたこと」でないのは確かである。

14）ヤウガンダラーヤナまで死んだふりをする理由はほとんど問題にされていない。目につくところではV. Venkatachalam (Op. cit., p. 97)が「より信憑性を増すため」であると述べているが,別に根拠はないようである。しかしそれなら別に国の要であるヤウガンダラーヤナ自身が姿を消さずとも,ほかの召使かなにかでもいいはずである。パーンダヴァ五兄弟がそうしたように,身代わりを本当に殺して死体を転がしておくという方法もある。

15）KSSに登場するゴーパーラカとルマンヴァットが本戯曲の出典となった物語にも登場したということは正確には断言できない。しかしBṛhatkathāには登場せずKSSにのみ登場するとも

考えにくい。原物語が KSS と同じくヤウガンダラーヤナの政治的手腕を主題にした説話であったことは確かである。その場合この二人はそれなりに重要な役割を担う登場人物であるし，政治を行う人物がヤウガンダラーヤナ一人しか登場しないとすると説話として成立しがたい。従って二人が本戯曲に登場しないことは劇作者の意志による可能性が高い。同様に次に扱った第 1 幕の構成も原典にあったものでなく劇作者の手になるものであることが確実である。つまり KSS のやり方はこの劇の原典と共通している。なぜなら政治的説話の発端としては KSS のやり方が全く当然であるし，ここに書いた理由以外にこのような構成を採る理由はないからである。